

戦後におけるリベラル・アーツ教育の導入

立原ゆり

近年、リベラル・アーツが注目を集めており、「リベラル・アーツ学部」や大学のミッションとしてリベラル・アーツを標榜する大学が増えつつある。そのきっかけとして、2000（平成12）年の大学審議会答申「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」や、2002（平成14）年の中央教育審議会答申「新しい時代における教養教育の在り方について」があり、これらの答申を受けて、従来の教育課程が見直され、アメリカのリベラル・アーツ・カレッジの教育課程に倣った改革を進める大学が注目されていると言える。

しかし、リベラル・アーツ教育という言葉は、日本において明確な定義付けがなされているわけではなく、それぞれの大学独自の意味が付与される傾向にある。また、アメリカのリベラル・アーツ・カレッジの教育課程にも、時代によって変遷が見られる。そこで本研究では、リベラル・アーツ教育のカリキュラムに着目することによって、戦前の移入期と戦後の改革期の教育課程の比較を通して、日本のリベラル・アーツ教育の性質を探ることを目的とした。最初に新制大学の認可を受けた女子大学のうち、現在もリベラル・アーツ教育を教育方針として掲げている津田塾大学、東京女子大学、神戸女学院の3大学を対象とし、具体的には、戦後の教育改革を通して、アメリカの関係者が積極的に推し進めてきたリベラル・アーツ教育の内容、また、戦前日本の専門学校で行われていたリベラル・アーツ教育の内容、そして戦後の改革期を通して、改革担当者の持つリベラル・アーツ教育観が与えた影響について考察した。

まず、戦後の教育改革を通して日本に導入されたリベラル・アーツ教育は、「リベラル・エデュケーション」から変容した、日本独自の要素を持つものであった。戦後教育改革の際、新制女子大学はアメリカの女子カレッジをモデルにカリキュラム編成を行い、リベラル・アーツ科目を重視するカリキュラムを採用した。しかし、アメリカに由来する「リベラル・エデュケーション」の理念と「ジェネラル・エデュケーション」理念に基づく一般教育課程が混同されて導入されたと考えられる。

次に、新制女子大学設立時に導入されたカリキュラムは、戦前の日本で行われていたリベラル・アーツ教育とは異なっていた。戦前のカリキュラムでは、課程全体を通して「幅広い」科目構成になっているのに対し、新制大学のカリキュラムでは、「幅広い」学びは前期2年間で終え、後期2年間は専門的な学習を行う構成へと変わった。新制大学のカリキュラムでは、専門教育との繋がりの中にリベラル・アーツ教育が位置づけられたと言える。

また、新制女子大学におけるリベラル・アーツ教育の根底には家庭人としての女性の役割も重視されていた。当時の女子専門学校では、良妻賢母主義に基づいた教育が未だに主流であった。戦後の改革担当者たちが、こうした風潮を考慮したとすれば、導入初期において、リベラル・アーツ教育を通して養成すべき人材には家庭人としての立場を重視する要素があったのも当然の帰結といえるだろう。

（指導教員 溝上智恵子）